国語科総論

テーマ　　「伝え合う力」の育成　～学びを拓くために～

1．テーマ設定の理由

「伝え合う」ということは、言語を用いて生活することの最大の目的ではなかろうか。狭い意味でいう「伝える」は自分以外の対象に自分のもつ情報をメッセージとして送ることである。そのためにはさまざまな媒体が存在するが、その最も根幹をなすものが言語であろう。これは非言語によるメッセージも受け手が最終的に言語化することで、汎用性のあるものに整理されるということからもうかがえる。さらに、広い意味で言えば「伝える」とは内言をここに含めることになる。人がその外部からのメッセージを自分の中で言語化する、という作業も含むものであるととらえられる。こうした前提に立ち、さまざまな言語活動を通して言葉を使う力を高めていくことを目指して、本校では、１・２年次〔「伝える力」の育成〕という教科主題を設定し、研究を進めてきた。

教科主題へのアプローチの方略としては、次の２点を設定した。

(1)既習の事項をつなぎ合わせて新たに自分の意見をつくること ═══ 内部情報の統合化

(2)他者と交流することで自分の意見を見つめ直すこと ═══ 外部情報の統合化

他者と情報をやり取りし、自己の次への課題を見つけ、本当に伝えていこうと努力する姿勢がこれからの国語科で求められる自主的な学びの姿である。総合された内部情報と外部情報の統合化が、国語科における「学びが拓く」であるととらえたい。

さて、以下は佐藤学氏（東京大学大学院教授）の指摘である。(『教師たちの挑戦』小学館 2003)

> 授業の改革が広く深く進行している。10 年ほど前ならば、活発に意見がぶつかり合い、教師の巧みな発問と誘導で劇的な盛り上がりを示す授業が「すばらしい」と絶賛されていた。しかし、今は、いくら活発な議論で盛り上がる授業を提示されても、多くの教師は、どこかそぐわない感じを抱いてしまう。教師たちが追求している授業のイメージが転回したのである。
>
> 私の訪問している学校で、ほとんどの教師が魅了される授業は、しっとりとした関わりの中でつぶやき声を聴き合い、一人ひとりの細やかな思考をていねいに擦り合わせる授業である。…… 今、日本の教室は、その内部で静かな文化革命が進行している。

冒頭に「響き合う関わりから学び合う関わりへ」と題されたこのくだりからも明白であるが、「伝える」は今や、革命？の中でしっかりと双方向の意味を持ってきている。一方的な伝達の意味でなく、他者を意識した「伝え合う」「響き合う」「擦り合う」「学び合う」へと進行しているのである。

そこで、３年次は現行学習指導要領の目指すところをもふまえ、私たちは教科主題を〔「伝え合う力」の育成〕と発展させることとした。

2．国語科でつけたい力（基礎・基本の定着をはかるために）

国語科では、１年次より、その学習を通じて身につけさせたい（＝向上させたい）力の視点を以下の４点に定めた。(詳細は本校「いとなみ」第 42 集参照)

(1)語彙（＝単語とそのコード）の力

(2)構成する（＝適切な言語を選択する）力

(3)分析する（＝他者の用いる言葉について、自分の経験を踏まえて取り入れる）力

(4)推敲する（＝より適切な言葉の検索あるいは発見する）力

実際の学習場面では、この身につけさせたい力を用いて活動（＝経験）をする。そこでの活動（＝経験）を経て、そこで用いた力が向上すること、かつ、そのことが検証されることが学習であると考えたい。また、その経験につながる設定が国語科における課題であるとも考えたい。その際に大切になるのが基礎・

基本である。国語科では、基礎基本を本校総論に従って「学習指導要領に示される内容」ととらえている。

3．本年次の研究について

3年次となる今年度は、学習単元の中に、「学びを拓く3つの視点」（本校総論）に沿った学習過程を構想することで取り組んでいきたい。

①主体的に問題を解決する力

主体的に問題を解決するとは、自分の意志や判断を大切にして課題を設定し、解決へ向かうことである。国語科では、これを「強い課題意識」という視点でとらえる。それは当然、個に応じた課題意識（＝学習目標）であり、とりわけ「伝える」という表現活動においては、何を表現伝達するか、どう表現伝達するか、なぜ表現伝達するか、と細分化して強く意識させることによって達成されると考えたい。

そこで本年度の実践では、「何を」＝伝達の内容、「どう」＝伝達の手段・技能、「なぜ」＝伝達の意欲や相手意識、のそれぞれをいっそう明確にして、より強い課題意識を持った表現活動を展開していく。

②自己を表現しコミュニケーションする力

一般的な学習理論で言えば、コミュニケーションは、他者との関わりの中で学ぶということになろうか。学習過程の中で他者に学び、他者との交流を通して自らの学習を高めることである。これは本校国語科で言う外部情報の統合化である。もちろん国語科の場合は、コミュニケーションが学習の手段ではなく、コミュニケーション力を高めることそのものが学習となる。

本年度の実践でも、昨年度まで同様に「伝え合う」ための下位条件としての「聞く」力・「読む」力と、「話す」力・「書く」力をそれぞれに高めつつ、双方向な学習場面を経験させることで、その力を高めていきたい。

なお、1・2年次研究においても「伝える」に焦点化して4領域を総合的にその対象としてきたが、今年度の「伝え合う」もまた「話す・聞く」に限定されない学びを構想していく。ケータイメールやチャットの時代に、文字表現による伝達が見直されつつあるというのも面白い現象である。

③学びを振り返る自己評価の力

自己評価にはさまざまな意義や効果があろうが、大村はま氏が指摘するように、評価とは「自分のしていることをよく見つめて、どういうことが足りないのか、どういうことが比較的良いのか、その程度や種類をつかんで次の段階への指針としていくこと」であり、重要なのは「積極的な自己評価」、また「現在進行形・未来形」の評価「優劣の彼岸」にある評価（2003,鳴門教育大での講演）である。これは、つまるところ自己評価力が自尊感情の確立にこそその最終目標を置くということを如実にあらわしていると言えよう。東 洋 氏は著書『子どもの能力と評価』において「教育評価の究極の役割は、子どもたちが、自分が行為すること、ひいては自分が存在することが意味あることなのだと認識するのを助けることだと思います」（傍点は引用者による）と述べている。

本年次の実践では、本校総論「肯定的な自己評価」に沿って、最終段階だけでなく学習過程の途中段階に自己評価の場面を設定したいと考えている。そして、単元の途中段階では学習の到達への「効力感」を持たせる自己評価や自分の「よさ」を認識できるような自己評価を、最終段階では学習を終えた「成就感」を持たせる自己評価を設定したい。また、他者評価（相互評価や教師評価）を適宜取り入れることで、自己評価力を高めたい。他者を評価したり他者から評価されることは自己モニタリングを助け、自己評価力を一層高めるであろう。

＊自己効力感 ═ アメリカの心理学者バンデューラが提唱(1977)した社会的学習理論の概念であるセルフ・エフィカシー(self-efficacy)の訳語。自己効力感とは、実際にその行動を生起することができる可能性や自信を持つこと。つまり、行動変容するテーマに対してどれだけ自信があり、「できる・できそうだ」と思っているのか、また見通しが立っているのかということである。単に「効力感」とも呼ばれている。

実践例　１年生

①題　　材　　「古典を楽しむ」

②題材について

極めて「やっかいな教科・科目」の一つとして国語科の古典領域を挙げる高校生にしばしば出会う。彼らは古典の世界を英語以上に「外国語」と感じ、受験のためにやらねばならない「苦学」だと認識しているらしい。思い返してみると、「帰ってみればこはいかに…♪」「卯の花の…夏は来ぬ♪」「若き日はや夢と過ぎ…♪」等々、知らず知らず古語や古典的な言い回しを子ども達に習得させていた童謡や文部省唱歌のほとんどが姿を消し、和歌を配した「湯飲み」や「海苔の缶」も目にすることがなくなった現在、古典の「基礎基本」を持たぬ彼らには、古典が英語よりはるかに非日常であることは至極当然の帰結なのかもしれない。

古典の授業を「楽しくて力のつく」ものにしたい、本単元は国語科授業者としては当たり前の素朴な願いから構想を出発した。そしてその方略として次の二点による単元構成を試みることとした。

一つは、長期間継続的に学習を進めることである。小学校５・６年生で文語調の文章（俳句等）に触れるものの、大半の中学一年生にとって古文は初めての出会いとなる。年間の指導計画で一時期集中的に学習するのではなく、何回かの出会う（学ぶ）機会を設けることで古典への抵抗をなくしたい。具体的には、８月末から始まる本校の教育実習期間に第一次をスタートし、１月中旬に第四次を終える計画（詳細は学習計画参照）とする。

二つには、多様な方法で古典に触れ、古典を楽しむことである。具体的には「竹取物語の続きを古文調で書こう」「童謡・唱歌から古典を見つけよう」「江戸俳諧の鑑賞文を書こう」「百人一首セレクト 20」等、レポート作成や読み書き関連学習を進める中で、古典を楽しく学びたい。

（「百人一首セレクト 20」は、和歌山大学の菊川恵三先生の指導による。）

さて、当該時授業「江戸の俳諧」は、読み書きを関連させた「鑑賞文を書く」授業である。導入として「江戸笑話」も扱うが、江戸時代の散文や韻文、また江戸時代の人々の感性が、現代に生きる私たちにも充分共感できるものであることを理解させたい。小学校での既習事項（附属小では光村図書６年上）ではあるが、中学生らしく、言葉の一語一語にこだわった、より深い読みができればと考えている。読み取りの例題として「夏河を越すうれしさよ手に草履（蕪村）」を扱うが、江戸時代の俳人の心情と現代に生きる私たちが同じような感覚を持って生活していると感じ取ってくれれば幸いである。「味わう」とは身をもって感じることであり、生活感覚として納得することだと思う。

なお、限られた時間数での学習となるのは現行学習指導要領での必然である。家庭学習（宿題）を取り込みつつ本単元全体を進めたい。（家庭学習を単元全体の学習計画にどう位置づけるか、討議する必要があろうが…。）

以下、本校総論に「学びを拓く３つの視点」および今年度の国語科総論に沿って、授業の構想を述べる。

(1) 主体的に問題を解決する力

国語科総論に従って「主体的に」を「強い課題意識」ととらえ、「何を」＝書く内容、「どう」＝書く技能、「なぜ」＝相手意識、と考える。本次では書く内容については、例題で学んだ読み取りの手法を活用してそれぞれに選んだ俳句の内容（書く材料）を収集させたい。書く技能については、いわゆる型はめ作文の方法と例文の提示によって、読み取った内容と自身の感想を書き分けることをねらいとする。相手（読み手）については、学級内の相互評価を通して意識づけたい。

(2) 自己を表現しコミュニケーションする力

本次では、前半で例題俳句の学級での読み深め、後半のグループ活動による読み取り、書き上げた作文の相互評価の場面をコミュニケーションと位置づけたい。

(3) 学びを振り返る自己評価の力

第一次、竹取物語の学習後に学習を振り返った子ども達の感想の一部を以下に紹介する。

◇古典の授業で印象に残ったのは、暗唱テストと続き物語作りです。テストはきちんと覚えることで古典が身についたと思います。物語作りは自分で考える力をつけ、古典を使うことで深く楽しめたと思います。昔の言葉遣いなど少し難しかったですが、一度覚えると簡単に思えて楽しくなりました。

◇自分で古典の続きを書くところは楽しかったが、古文を現代語に直すのが分かりにくく、その点ではあまりおもしろくなかった。

◇とても興味深くおもしろい。現代の言葉と意味が違うのはなぜなのか気になる。

第一次では「古典はおもしろかったですか」との問いに９０％の生徒が「おもしろかった・まあまあおもしろかった」と回答している。また授業内容では、冒頭部分の暗唱の楽しさ、ストーリーのおもしろさ、古典への興味、続き物語作りなどへの関心が挙げられていた。

第二次では、作成するレポートについて「私のレポート、ここが自慢」とアピールする方法で、肯定的な自己評価を試みた。また第三次では、鑑賞文を書く前の段階で学習の振り返りをし、鑑賞文を書くための「効力感」を持てたかどうかを確かめたい。さらに随時、相互評価場面を設定することで自己評価力を高めたい。成就感・充実感を確かめる評価は第四次を終えた後に行う。

③学習目標（評価規準）

基礎・基本	学習の目標 (B イ, C ア, C オ)	・古典に関心を持ち、古典を学ぶことを楽しもうとする ・仮名遣いに注意しながら音読し、文語のリズムを感じ取る ・自分の考えや気持ちを明確にして書く
関心・意欲・態度	・文語のリズムに関心を持ち、古文に親しもうとしている ・古典的なものの見方や感じ方に関心を持とうとしている	
書　　く	・自分の考えや気持ちを明確にして、鑑賞文を書いている	
読　　む	・表現の違いや現代仮名遣いに注意して音読し、古人のものの見方や感じ方を理解している	
言語知識・理解・技能	・仮名遣いに注意しながら音読し、文脈の中で古語を理解している	

④学習計画（本時＝第三次２／２）　…… **単元構成＆評価規準表は、次頁の表を参照**

第一次「竹取物語」（三省堂「かぐや姫の物語」他）……（４時間）

＊仮名遣いに注意して竹取物語を音読し、古文と現代文を比較しながらストーリーを楽しむ。

＊竹取物語の続き物語を書く。

第二次「私の見つけた古典」……（１時間）

＊童謡や唱歌の中にある文語的表現に着目し、身近な生活の中から文語的表現を見つける。

第三次「江戸の俳諧」……（２時間：本時 2/2）

＊江戸時代の俳句（芭蕉、蕪村、一茶）を読み味わい、鑑賞文を書く。

第四次「百人一首セレクト 20」……（１＋帯時間）

＊「百人一首セレクト 20」を楽しみながら、古文のリズムを感じ取る。

⑤本時の目標

＊江戸時代の俳句を読み、言語を介して想像する技能・方法を身につける。

＊取材や構成の方法を身につけて鑑賞文を書く（書く見通しが立つ）。

⑥本時の展開

	学　習　活　動	教　師　の　支　援	備　考
導入	・「百人一首セレクト 20」を楽しむ ・本時の目標を確認する	・５分以内で活動を終える ・本時の目標はワークシートに記しておく	セレクト 20 ワークシート 1
展開Ⅰ	・例句「夏河を…」を読み、大意をつかむ ・句のイメージを広げ、味わう ・鑑賞文を書く準備をする	・読み方と語の意味を確認することで、大意をまとめさせる。 ・「河」の語を中心にイメージを広げさせる。（いつ・どこ・なぜ 等を手がかりに） ・例文を使って鑑賞文の構成を理解させる	ワークシート 2 ワークシート 3
展開Ⅱ	・選んだ俳句を鑑賞する（グループ、個人）	・展開Ⅰの手法を利用して句のイメージを深めさせる。（グループで話し合い）	ワークシート 4
	・鑑賞文を書く。（宿題とする）	・広げたイメージを整理させる。 ・作文の構成を確認させる。	ワークシート 5

単元『古典を楽しむ』（１年生）　単元構成＆評価規準表

学習過程		時	学習活動	基礎・基本 評価規準（B）	充分満足できると 判断できる状況（A）	努力を要する（C） 生徒への手だて	「学びの拓き」に 関わる力	観点
第一次	竹取物語 （４時間）	1	・古典とは何かを知り、竹取物語の内容を楽しむ	○古典の世界に興味を持とうとしている	◎古文の世界を、現代と比較しながら興味を持とうとしている	▼図書資料を活用しながら内容理解を支援する	◆主体的に課題を発見する力（①）	【関心】
		2	・仮名遣いや文語のリズムに注意しながら竹取物語を読む	○竹取物語の冒頭(原文)を正しく音読している	◎竹取物語の冒頭（原文）を暗唱している	▼机間指導や個別指導で音読を促す	◆古典を音読する力（①②）	【言語】１ア
		3	・別れに際しての人物の心情を読み取る	○各人物の心情を理解している	◎各人物の心情、天女とかぐや姫の心情の違いを理解している	▼口語訳を活用して心情を考えるように机間指導する	◆登場人物の心情を読み取る力（①）	【読む】Ｃオ
		4	・竹取つづき物語を書く	○竹取物語の話を振り返って、つづき物語を書こうとしている	◎文語調のリズムを理解し、竹取物語の話を振り返って、つづき物語を書こうとしている	▼竹取物語の結末を復習してから書くように机間指導でアドバイスする	◆学びを振り返って課題を決定する力（①③）	【関心】
第二次	私の見つけた古典 （１時間）	5	・身のまわりの「古典」を発見し、レポートにまとめる	○童謡や唱歌、身近な生活の中にある古典に気づいている ○身近な「古典」を発見しようとしている	◎童謡や唱歌、身近な生活の中にある古典にたくさん気づいている ◎身近な「古典」をたくさん発見しようとしている	▼実際のいくつかを例示することで気づきを促す ▼小学校時代の校歌や音楽副読本、童謡唱歌のウェブサイト、地域の社寺や歌碑などを紹介することで意欲を喚起する	◆意欲的に「古典」を発見する力（①） ◆レポートによって学びを発信する力（②） ◆ 学習を振り返り、自身のよさを発見する力（③）	【言語】１ウ 【関心】
第三次	江戸の俳諧 （２時間）	6	・江戸の俳諧を読み味わう	○ことばに即して俳句を理解している	◎ことばに着目して俳句を読み深めている	▼着目することばを指示したり、グループでの読み取りを参考にすることで材料を集めさせる	◆課題とする句を選択する力（①） ◆主体的に鑑賞文を書く力（①） ◆学級やグループで読み深めのための意見交換をする力(②)	【読む】Ｃア
		7	・俳句の鑑賞文を書く	○読み取ったことをもとに、自分の考えを書いている	◎読み取ったことを整理しながら、自分の感想や考えと区別して鑑賞文を書いている	▼例文をもとに鑑賞文を書くように促す	◆学びを振り返って見通しを立てる力（③）	【書く】Ｂイ
第四次	百人一首 セレクト20 （１時間＋帯時間）	8	・百人一首セレクト 20 を楽しむ	○古文のリズムを感じて読んでいる	◎セレクト 20 のいくつかを暗唱している	▼勝敗が均衡するように対戦相手を交代しながら進めていく	◆進んで和歌に親しもうとする力（①）	【言語】１ウ 【関心】

「学びの拓き」＝ ①主体的に問題を解決する力、②自己を表現しコミュニケーションする力、③「学び」を振り返る自己評価の力

⑦結果と考察

実践後の感想を率直に述べるなら、「楽しくて力のつく古典の授業」という本実践のコンセプトが相当高い目標であるということが今更ながらの実感だ、ということになろう。公開授業日の指導助言先生方からもご指摘頂いたが、「セレクト 20」だけでなく継続的にこうした取り組みを２年次・３年次と続けていくことが課題となるのは当然である。

以下、実践構想に沿って考察を加えることとする。まず、(1) 主体的に問題を解決する力については、「主体的に」を「強い課題意識」と置き換え、「何を書くか」「どう書くか」を焦点化した試み（＝鑑賞文を書く）は、生徒にとって「書きやすい」状況を設けるのに貢献できていると考えられる。「何書いたらええん？」「どんなに書いたらええん？」と尋ねる生徒が激減したこともその現れであるし、提出された鑑賞文も、授業者の評価では、A＝ 72 %、B＝ 21 %、C＝ 7 %であった。ただ、「なぜ＝相手意識」の課題は学級内の相互評価では不十分であった。

次に、(2) 自己を表現しコミュニケーションする力の育成では、学級での例句の読み深めやグループ活動による読み取りが奏功したと考えられる。上記授業者による評価が全体的に好成績であることからもそのことが伺えるであろう。が、明確な検証方法をとらなかったことに問題が残る。

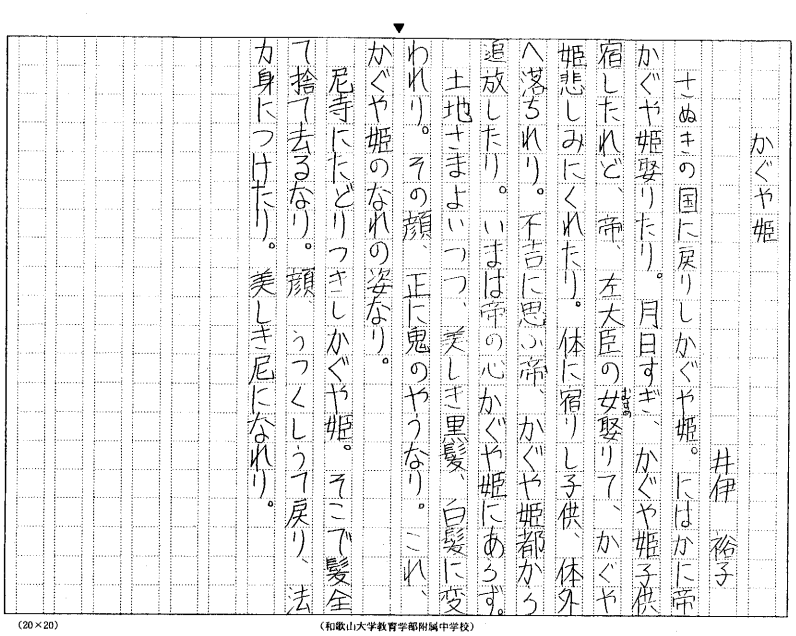
(3) 学びを振り返る自己評価の力、とりわけ鑑賞文を書く直前については次のような結果が出ている。

（資料ワークシート３より、 ◎＝４点、○＝３点、△＝２点、×＝１点として平均値を計算）

	全 生 徒	成績上位群	同 中位群	同 下位群
①俳句の読み取り方がわかったか	3．6	3．7	3．5	3．5
②鑑賞文の書き方がわかったか	3．4	3．5	3．4	3．2
③鑑賞文が書けそうか	3．0	3．1	3．1	3．0

まず特徴的なのは、①②③とも比較的高い数値が示されていることであろう。「肯定的な自己評価」力を高めるという点においてはかなり達成されたと考えている。また、着目点とした効力感（＝できそうだという自信）は③にあたるが、これもかなり高い数値を示していると言えよう。しかも、①②③ともに、成績（１年生前期成績による）の上位・中位・下位にそれほどの差異がない。国語の学力（学習への意欲を含む）に影響されず、成就感・効力感とも得られたととらえられる。

楽しくて力のつく古典の授業、現行指導要領の限られた時数の中では一層系統的にカリキュラムされる必要があろう。


かぐや姫

井伊 裕子

竹取つづき物語を書こう

古典を楽しむ！

課題 お話つくろう！

一筋の煙月へ立ち上りけり。……

かぐや姫、その煙眺むればたちどころに記憶戻りたり。

【一筋の煙が月へと立ち上ってきました。かぐや姫はその煙を眺めると、そのとたんに（地上での）記憶が戻りました……】

さあ、記憶が戻ったかぐや姫はどうしたでしょうか？ 自分で物語のつづきを考えてみましょう

◆ 次の２つの条件で書いてみよう。

①古典っぽく書いてみよう

②一五〇字～二〇〇字で書こう

俳句の鑑賞文を書こう

（ワークシート1）

2時間目の目標

＊＊俳句を読み味わい、言葉を使って想像する。
＊鑑賞文を書くための材料を集め、作文の見通しを立てる。

★次の条件で、あなたも江戸の俳諧の鑑賞文を書いてみましょう。（対象となる句は、次のb～eより選ぶこと）

【条件】
1　指定の用紙1枚以内で書くこと。
2　三段落構成で書くこと。
・一段目には、句全体の様子を書く。
「……」と、～～のような俳句である。――と結ぶこと。
・二段目には、句中の言葉の説明やあなたの想像を書く。
「……」が、私は好きだ。――と結ぶこと。
・三段目には、今（現代）と比べて、あなた自身の感想を書く。
3　選んだ俳句を、鑑賞文の前に「筆（筆ペンでもよい）」で書くこと。
＊用紙の余白に絵を描いてもかまいません。

a　夏河を越すうれしさよ手に草履　（与謝蕪村）
b　秋来ぬと合点させたるくさめかな　（与謝蕪村）
c　名月をとってくれろと泣く子かな　（小林一茶）
d　名月や池をめぐりて夜もすがら　（松尾芭蕉）
e　斧入れて香におどろくや冬こだち　（与謝蕪村）

あなたの心に響く俳句はどれ？

俳句の鑑賞文を書こう

（ワークシート3）

夏河を越すうれしさよ手に草履

「夏、河の中に入って渡ってゆく、なんという気持ちのよさよ。手に草履をもって裸足で渡ろう」**と、**はしゃぐ子ども**のような俳句である。**

「夏河」と書いているので季節はもちろん「夏」。「河」は、はば数メートルもある大きめの河だろう。この句のおもしろさは、「手に草履」を持って裸足で水の中に入っていくところだ。夏の暑い日にひざまで水につかる冷たさ、透き通る水、次第に引いていく汗、遠くにはせみの声。子どものように水の中を向こう岸へと突き進む作者のよろこびが手に取るようにわかる。

現在なら立派な橋もあるだろうが、それでも水に入ってゆく無邪気さ。大人になっても忘れたくない「夏河」の意外なほどの冷たさ。そんな子どもの心を呼び覚ましてくれる**この句が、私は好きだ。**

名前　北垣　芽論

私の感想　言葉の説明や私の想像　俳句全体のようす

（　組）名前（　　）

①俳句の読み取り方がわかりましたか？	◎	○	△	×
②鑑賞文の書き方がわかりましたか？	◎	○	△	×
③鑑賞文が書けそうですか？	◎	○	△	×

俳句の鑑賞文を書こう

（提出用）

名月を　とってくれろと　泣く子かな

「秋」、月見を家ぞくとしていると、月がだんごに見えたのだろうか、小さな子が満月を取ってほしいと泣いて家ぞくをこまらせている。ということのような俳句である。

「名月」というと十五夜だろう。だから季節は「秋」。すすきがゆれているのを下で月を見ているのだろう。この句のおもしろさは、「名月をとってくれろと」という所だ。今の子どもはそんな夢のある事を言わないだろう。すずしい秋の風がふく庭が思い浮かぶ。

現在お月見をする家はほとんどないのではないだろうか。月がだんごに見えたのだろうか。とてもキレイだったのだろうか。月を取ってほしいなど夢があるこの句が私は好きだ。

言葉の説明や私の想像

俳句全体のようす

私の感想

B組　　番　名前

俳句の鑑賞文を書こう

（提出用）

名月や池をめぐりて夜もすがら

「中秋の名月」の美しさに、つい池のほとりをめぐって、一晩中すごしてしまった」ということ、趣き深い俳句である。

「名月」と書いているので季節は「秋」。「池」は、自分の家の庭にある小さな池だろう。池の中にはこいがいて、「ピシャ、ピシャ」とはねる音や、しずおどしの「カコーン」という音。遠くにはすずむしの声。静けさの中に、様々な音までもが、浮かび上がってくるように思える。

現代人は、忙しさのためにに、季節の移り変わりや美しさを感じられていない。この句を読むと、少しだけゆっくりとまって、季節を感じ、美しさに感動する事の大切さを気づかせてくれた。なぜかこの句が私は好きだ。

言葉の説明や私の想像

俳句全体のようす

私の感想

C組　　番　名前

実践例　2年生

① 題　材　「説明文を読み解く　～サブテキストを使って～」

② 題材について

メディア、インターネット、本など、多くの情報が錯綜する今日、それを自分の知識として活用し、発信するための能力が必要だ。「説明文を読む」という授業には、その判断がスムーズにできる力を身につけることを意識した取り組みが必要なのではないか。そんな思いを強く持った。

通常の「説明文」の授業では、文章の構成や要旨をまとめるなど、説明文を読むための様々な試みをしてはいるものの、そこにいつも感じる問題意識があった。それは、①生徒間に理解力の差があるにもかかわらず、個々の能力に応じた活動を取り入れることが難しいこと。②要旨をまとめる作業を繰り返すと授業の展開に変化がなく、活動意欲を損なう可能性があること。であった。そこで、今回は説明文の内容の理解を全体の文章構成図を完成させることに重点を置き(文章の構成を読む力)、その後、本教材に関連のあるいくつかの文章を読み(情報を収集する力)、それを加工してメインテキストに書き込む(文章表現に工夫して書く力)という授業を展開してみたいと考えた。また、この単元を組むにあたり、本校総論、ならびに本年度の国語科総論に沿って、次の力をつけることを念頭に置いて計画を立てた。

① 主体的に問題を解決する力…構成図を作成することで文章全体を見渡し、接続詞や具体例を見つけ、「何を」（挿入して書く内容）「どう」（どんな接続詞を使うか）について、見通しを立てて活動できるようにする。また、自分の興味のあるサブテキストを選ぶことで、意欲を高めるようにする。

② 自己を表現し、コミュニケーションする力…オリジナルの文章を作成し、情報と自己とがじっくり会話することで理解を深め、その文章の良さを仲間に伝え合う楽しさを実感できるようにする。

③ 学びを振り返る自己評価の力…サブテキストを挿入する前に、「できそうだ」という効力感を持つための自己評価、文章を加工した後の「できた」という達成感を味わえるようにする。

③ 学習目標　(評価規準の設定、基礎・基本)

基礎・基本	**学習の目標**	**文章の構成を理解し、その文章に応じた情報を選択する。 文章の形態に合わせて加工し、挿入する。**
関心・意欲・態度	**・説明文の構成を理解しようとする。**	
書く	**・適切な文章構成を工夫している。 ・書いた文章を互いに読み合い、文章の展開の仕方や材料の活用の仕方について自分の表現に役立てる。**	**構　成　　ウ 評価・批評　カ**
読む	**・必要な情報を集め、自分の表現に役立てている。**	**情報の活用　オ**
言語知識・理解・技能	**・文の組み立てについて考え、適切な言葉を選んで書いている。**	**話や文章、文　エ**

④ 学習計画　(単元構成表)

第一時	学習の目標・流れを確認し、見通しを持つ。 全文を通読し、漢字・語句の学習をする。
第二・三・四時	文章の内容を読み取り、理解を深める。 ・　三つのまとまりの役割やその内容の組み立てを考える （筆者の意見と具体例の部分を分けて考えるようにする） ・　「受容的な知性」「攻撃的な知性」が何を示すのかを考える。 ・　筆者の「問い」と「その答え」をつかむ。

第五時	接続詞、具体例に注意しながら文章全体の構成図を作成する。
第六時（本時）	構成図を利用しながら、挿入の例を示す。 次時への見通しを立てて、サブテキストを読む。
第七時	サブテキストを加工し、挿入する。 接続語・複数の段落にすることを意識させる。
第八時	相互に読み合い、「挿入箇所が適切か」「書き方の工夫」「筆者の主張と合っているか」という観点から評価し合う。

⑤ 本時の目標 (単元構成表＆評価規準表　参照)

- 文章構成図から全体像をつかむ。
- 接続詞に注意して例文をどの部分に挿入すればよいかを理解する。

⑥ 本時の展開

学　習　活　動	教　師　の　支　援	備　考
○　文章構成図を参考に全体像をとらえる。	●　よくまとまっている図をいくつか見せ、それぞれのよい点を説明する。 ・まとまりごとのつながりをどう捉えているかに注目させるようにする。	プロジェクター PC
○　例文がどこに挿入できるかを考える。	●　接続詞、内容を構成図で確認できるようにする。 ・生徒が発表できた意見を尊重するようにする。 ・挿入するときの文体を整える必要性についても注意する。	例文
○　解答例を確認し、次時の見通しを立てる。	●　自己評価表に見通しが立ったかを記入させる。 ・机間巡視をしながら確認する。	自己評価表
○　サブテキストを読み、必要な情報に線を引く。	●　机間巡視して語句の質問に答える	サブテキスト

※　テキスト　　・中学国語伝え合う言葉　２年　「ガイアの知性」　教育出版

※　参考資料　　・中学国語１年　「クジラたちの音の世界」　光村図書

・「生きていく野生動物２　アフリカゾウの世界」　黒田弘行　著　大日本図書

⑦ 結果と考察

説明文の読解の確認として文章の構成図を書かせた。前期の説明文の授業で、一つの段落を絵と文でまとめるということを経験しているので、様々な工夫を凝らした構成図ができた。このことが生徒たちにとって、ある種の自信と意欲につながったようだ。さらに、何人かの文章構成図の紹介ならびに説明によって、だいたいの生徒が具体例と説明の部分に注意して読み取ることができたようだ。また、例文を通して挿入の仕方もよく理解できたようだ。それは本時の中での自己評価[挿入の仕方を理解できたか]に×をつけた生徒がいなかったことに表れているように思う。しかし、サブテキストを読む姿には、戸惑いが感じられた。そこでその後の挿入の授業では、前時に続いて具体例に線を引くようさらに指示をし、挿入の授業に進んだ。はじめは「どうするん？」という声が聞こえていたが、次第にその声も消え、みんな一生懸命挿入文をさがし、それはどこに入れられるのか、どんな言葉を足せばよいか、メインとサブのテキストを懸命に読み比べていた。今回の展開の中心である２つ以上の文章を読み、そこから必要な情報を見つけ出すという目標に向かっ

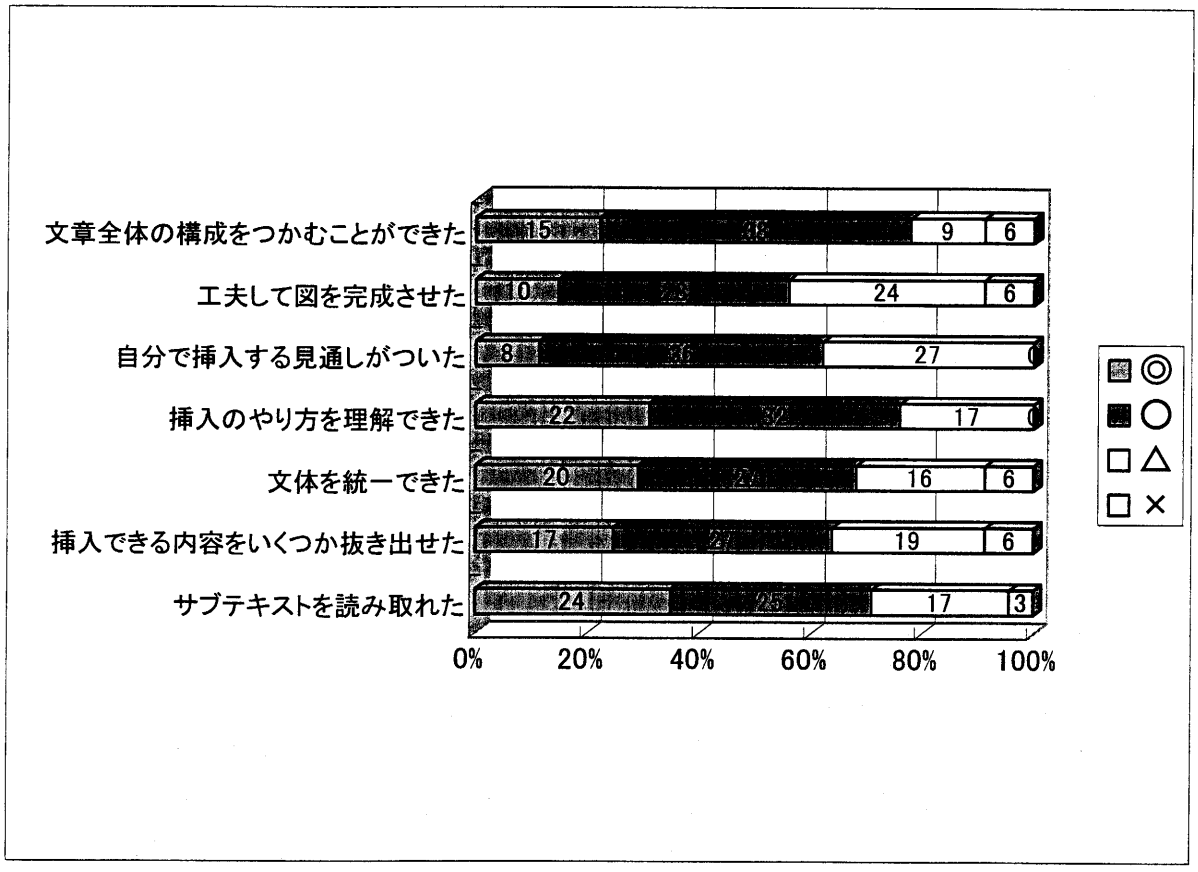
単元　「説明文を読み解く」(２年生)　★単元構成＆評価規準表★

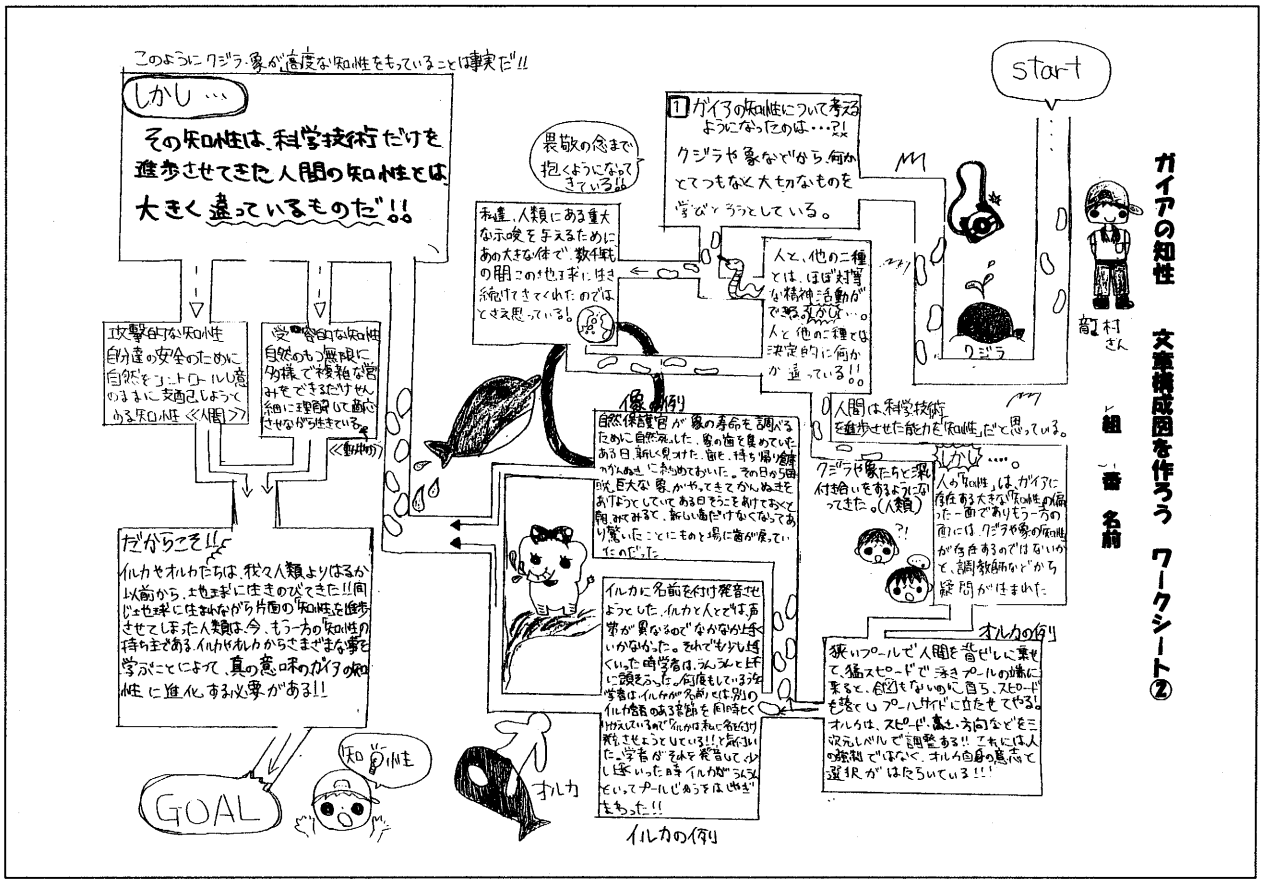
時間	ねらい　学習過程	基礎・基本 評価基準（Ｂ）	充分満足できると判断できる状況(A)	努力を要する(C)生徒への手だて	「学びの拓き」に関わる力	主な評価観点
1 2 3 4	**説明文の構成を理解しようとする。** **具体例をまとめて文章の内容を把握する**	○具体例をまとめようとする。 ○真の意味の「ガイアの知性」について考える。	◎具体例や考えをまとめるにあたって、自分の言葉でまとめようとしている。	▽机間指導で適切なヒントやアドバイスをする。	◆主体的に課題に取り組む力(①)	授業態度・ノート ワークシート① ノート 【関心・意欲】
5	**要旨や構成図作成に取り組み、全体像をつかもうとする。**	○三つの意味段落の役割を明確にしながら構成図を書けている。	◎形式段落の役割までを考えながら構成図を作成している。	▽段落のまとまりや接続詞に注意させるようにする。前時のノートを参考にさせる	◆構成図で学びを発信する力(②) ◆学びを振り返る力(③)	ワークシート② 自己評価① 【書く　ウ】
6(本時)	**サブテキストを読み、挿入可能な部分を抜き出す。**	○サブテキストの中から挿入可能な具体例に線を入れることができる。	◎サブテキストの中から具体例以外にも事実関係のある部分を抜き出せている。 ◎複数のサブテキストから抜き出せている。	▽机間指導で個人的にアドバイスする。 サブテキストを選ぶ時に容易なものを勧める。	◆主体的に課題を見つける力(①) ◆学びを振り返り見通しをつける力(③)	サブテキスト 【読む　オ】 自己評価②
7	**サブテキストをメインテキストに挿入する。**	○「例えば」の接続詞を的確に使って書くことができている。 ○文脈に合わせて適切な箇所に具体例を挿入できている。	◎「例えば」「また」「さらに」などいくつかの接続詞を適切に使って書くことができている。 ◎文脈に合わせ、具体例を挿入し、文体にも統一性を持たせて書けている。	▽挿入の仕方を提示する。テキスト中の接続詞の使い方に注目させる。机間指導で個人的にアドバイスをする。	◆主体的に課題に取り組む力(①)	ワークシート③ 【言語　エ】 【書く　ウ】
8	**グループで相互評価しながらそれぞれの文章の良さを味わい、自分の文章に活かす。**	○友達の文章を読み、接続詞の使い方や文章のまとめ方の良い点を見つけることができる。	◎友達の文章の良い点を積極的に探し、その良い点を自分の文章に活かせている。	▽グループで相互評価の場を持たせる。グループにteachリーダーを作る。	◆自己を評価しコミュニケーションする力(②) ◆学びを振り返る力(③)	相互評価表 ワークシート③ 【書く　カ】 総合評価表

て、生徒たちは意欲的に取り組めていたようだ。初めは１ヶ所しか挿入部分を考えていなかった生徒も、要領をつかむと２ヶ所目を探し出していた。そのため、１時間の設定では難しかったようで、残りを宿題にするほかなかった。また、その他の反省点として、挿入後の自己評価の統計で、[挿入する見通しがついた]という割合に比べると、「十分満足できた（◎）」と自己評価する生徒が増えたことは良いが、「満足でない(△・×)」と判断する生徒の割合が増えているという点がある。達成感を高めるためには、挿入場所・挿入文を考える時間において、もっと個人的な質問に答えたり、アドバイスしたりする時間を設定すべきだった。その後、第八時に班ごとに集まって相互評価の時間を設け、お互いの文章を読み合った。交互に読みながら、どんな点が自分と違うか・優れているか等を考えさせた。「自分と同じ部分をとっていても、挿入する箇所が違っていた。」「友達の文章のようにした方が自然なつながり方だ」など文章を熟読していると思われる意見も多くみられた。

メインのテキストの読解、サブテキストとの読み比べ、友達の文章の読み比べと、普段以上に読むことに重点を置いて授業をすすめた。その割には、生徒たちからは「また読むのか」などの意見は出ず、それぞれについて集中できていたことは良かった。しかし、効力感をもった後の授業での自己評価のデータには×をつけた生徒もいて、できあがった作品と見くらべてみると完成度を高めようとする意識が働いていると感じる生徒もいる反面、やり終えたという達成感を得られなかったと感じている生徒もいたということも否めないと思われる。今後、もっと生徒たちの質の高い達成感が持てるよう工夫・改善をする必要があると考えている。

下に示すのは自己評価のデータである。




ガイアの知性　文章構成図を作ろう　ワークシート②
組　番　名前
start
1 ガイアの知性について考えるようになったのは…?!
クジラや象などから何かとてつもなく大切なものを学びとろうとしている。
人と、他の二種とは、ほぼ対等な精神活動ができるが…。人と他の二種とは決定的に何かが違っている!!。
人間は科学技術を進歩させた能力を「知性」だと思っている。
しかし…
その知性は、科学技術だけを進歩させてきた人間の知性とは大きく違っているものだ!!
このようにクジラ・象が高度な知性をもっていることは事実だ!!
畏敬の念まで抱くようになってきている!!
和達、人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で、数千年の間この地球に住き続けてきてくれたのではとさえ思っている。
攻撃的な知性
自分達の安全のために自然をコントロールし意のままに支配しようとする知性《人間》
受容的な知性
自然のもつ無限に多様で複雑な営みをできるだけ繊細に理解して適応させながら生きている《動物》
だからこそ!!
イルカやオルカたちは、我々人類よりはるか以前から、地球に住きのびてきた!!同じ地球に住まいながら片面の知性を進歩させてしまった人類は、今、もう一方の知性の持ち主である、イルカやオルカからさまざまな事を学ぶことによって、真の意味のガイアの知性に進化する必要がある!!
GOAL
知性
クジラ
オルカ
象の例
自然保護官が象の寿命を調べるために自然死した、象の歯を集めていたある日、新しく見つけた歯を、持ち帰り歯かんぬきに結めていた。その日から毎晩、巨大な象がやってきてかんぬきをあけようとしていてある日もうこれを開けておくと開けてみると、新しい歯だけなくなっていてあり驚いたことにものと場に歯が戻っていたのだった。
イルカに名前を付け発音させようとした。イルカと人とでは声帯が異なるのでなかなか上手くいかなかった。それでも少し練くいった研究者は、ふんふんと上手に頷きふった。何度もしていると研究者はイルカが名前とは別のイルカ語のある音節を何時もくりかえしているので「イルカは私に名付け発音させようとしている!!」と解釈した。研究者が音を発音して少し経いった時イルカがふんふんといってプールじゅうを泳ぎまわった!!
イルカの例
クジラや象たちと深く付き合いをするようになってきた。(人類)
人の「知性」は、ガイアに存在する大きな「知性」の偏った一面でありもう一方の面にはクジラや象の知性が存在するのではないかと、調教師などから疑問がはきまれた。
オルカの例
狭いプールで人間を音ぜいに乗せて、猛スピードで泳ぎプールの端に来ると、危険もないのに自ら、スピードを落ってプールサイドに立たせてやる。オルカは、スピード、高さ、方向などを三次元レベルで調整する!! これには人の強制ではなく、オルカ自身の意志で選択がはたらいている!!

ガイアの知性　文章構成図を作ろう　ワークシート②
組　番　名前
⑧～⑪ 2
Q筆者が思う疑問
⑫～⑭ オルカゾーン
オルカやイルカは頭がイイ
⑮～⑯ オルカゾーン
オルカは明らかに人間の強制ではなくオルカ自身の意志選択が働いている。
人と鯨と象は似ているようだが人と他の2種とは決定的に何かが違っている…
⑤～⑦
三種の成長
④～⑤
人間が抱く畏敬の念
①～③
彼らには、独特の雰囲気がある
共通した
1
⑰～⑳ オルカゾーン
イルカにつけた名前を発音させようと試みた研究者にイルカもイルカ語でつけた名前を発音させようとした
㉒アフリカのケニアで自然保護官が新しく見つけた歯を倉庫に納めた所毎晩巨大な象がやってきて開けようとし、かんぬきをはずしたらその新しく見つけた歯だけなくなっておりそれは彼が発見した場所に戻されていた。
3 まとめ
鯨や象の知性
人間の知性とは全く違う知性
人間の知性
○鯨や象の知性
「受容的な知性」
自然のもつ多様で複雑な営みをできるだけ繊細に理解しそれに適応して生きるための高度な知性
○人間の知性
「攻撃的な知性」
自分たちだけの安全と便利さのために自然をコントロールし意のままに支配しようとする知性
これからの人間の知性について
○人間は今片面だけの知性だけを進歩させてしまったのだから、もう一方の鯨や象の「知性」を学ぶ
真の意味の「ガイアの知性」

ケニアのサンブール動物保護区の中にあるキャンプに宿泊していたときのことである。近くに象の一団が草を食べに来たのだ。象の一団は食べながら広がって、食事もしないで遊んだり、砂あびをしたりしている。のんびりした象の食事風景だった。

そのとき、草むらの向こう側のブッシュの中からもう一つの象の群れがすがたをあらわした。すると、今まで食事をしていた群れのリーダーが、新しくあらわれた群れの方へ歩き出した。他の象たちもリーダーのあとに従った。わたしは「けんかでもおこるのかな」と思った。しかし、二つの群れは静かに接近すると、どの象も鼻を前にさし出し、鼻先と鼻先をからまませた。二つの群れの象はお互い入り乱れて鼻で握手をしているのだった。

子象には大人の象から鼻をさし出してやっている。なんともほほえましくも、すばらしい挨拶行動を見せた。

集団の中で学ぶ ・ 絆を深める

ケニアのサンブール動物保護区の中にあるキャンプに宿泊していたときのことである。近くに象の一団が草を食べに来たのだ。象の一団は食べながら広がって、食事もしないで遊んだり、砂あびをしたりしている。のんびりした象の食事風景だった。

そのとき、草むらの向こう側のブッシュの中からもう一つの象の群れがすがたをあらわした。すると、今まで食事をしていた群れのリーダーが、新しくあらわれた群れの方へ歩き出した。他の象たちもリーダーのあとに従った。わたしは「けんかでもおこるのかな」と思った。しかし、二つの群れは静かに接近すると、どの象も鼻を前にさし出し、鼻先と鼻先をからまませた。二つの群れの象はお互い入り乱れて鼻で握手をしているのだった。

子象には大人の象から鼻をさし出してやっている。なんともほほえましくも、すばらしい挨拶行動を見せた。

さらに、こんな話もある。

こんな象の話がつたわっている。

いはゆる「知性」や

ガイアの知性　総合自己評価表　組　番　名前

★ 文章構成図	自己評価
① 工夫して図を完成させた	◎ ◎ △ ×
② 文章全体の構成をつかむことができた	◎ ◎ △ ×

組　番　名前

★ サブテキスト挿入プリント	自己評価
① 挿入のやり方を理解できた	◎ ○ △ ×
② 自分で挿入する見通しがついた	◎ ◎ △ ×

★ サブテキスト挿入を終えて ★

① サブテキストを読み取れた	◎ ○ △ ×
② 挿入できる内容いくつか抜き出せた	◎ ○ △ ×
③ 文体（敬体・常体）を統一できた	◎ ◎ △ ×

今回の授業を終えて　頑張ったところを書こう

1回読むだけだと、あまり理解できなかったので何回も何回も読みました。
この話は、何回も読んでだんだん理解できてくるとたのしい話でした。こうのもたのしいなあと思いました。
他の動物のかしこさをたくさんしりました。

ガイアの知性　総合自己評価表　組　番　名前

★ サブテキスト挿入プリント	自己評価
① 挿入のやり方を理解できた	◎ ◎ △ ×
② 自分で挿入する見通しがついた	◎ ○ △ ×

組　番　名前

★ 文章構成図	自己評価
① 工夫して図を完成させた	◎ ◎ △ ×
② 文章全体の構成をつかむことができた	◎ ○ △ ×

★ サブテキスト挿入を終えて ★

① サブテキストを読み取れた	◎ ◎ △ ×
② 挿入できる内容いくつか抜き出せた	◎ ○ △ ×
③ 文体（敬体・常体）を統一できた	◎ ◎ △ ×

今回の授業を終えて　頑張ったところを書こう

根ぶある文章の中で適当な例を抜きだして、それを要約するのが難しかったです。何処が必要で何処が不必要なのか、どういう風に書けば分かりやすく読みやすいのか、それをまとめながら書くのは本当に難しかったです。
でも、少し文章力(?)が上がった様な気がして嬉しいです。

ワークシート③　ガイアの知性

たつむら　じん
龍村　仁

ここ数年、わたしには鯨と象を撮影する機会がとても多かった。特に意識的に選んだつもりはないのに、結果としてそうなった理由を考えてみると、これは、鯨や象と深くつきあっている人たちが皆、人間としてとてもおもしろかったからだ。

人間も職業も皆それぞれ異なっているのに、彼らには独特の、共通した雰囲気がある。

彼らは、鯨や象を、自分の知的好奇心の対象とは考えなくなってきている。鯨や象から、なにかとてつもない大切なものを学び取ろうとしている。そして、鯨や象に対して、畏敬の念さえ抱いているようにみえる。

人間が、どうして野生の動物に対して畏敬の念まで抱くようになってしまうのだろうか。この、人間に対する興味から、わたしも鯨や象に興味を抱くようになった。そして、自然の中での鯨や象との出会いを重ね、彼らのことを知れば知るほど、わたしもまた、鯨や象に畏敬の念を抱くようになった。

今では、鯨と象は、わたしたち人類にある重大な示唆を与えるために、あの大きな体で（現在の地球環境では、体が大きいほど生きるのが難しい。）数千万年もの間この地球に生き続けてきてくれたのだと、とさえ思っている。

大脳新皮質の大きさとその複雑さからみて、鯨と象と人はほぼ対等の精神活動ができる、と考えられる。すなわち、この三種は、地球上で最も高度に進化した「知性」をもった存在だ、ということができる。実際、この三種の誕生からの成長過程はほぼ同じで、あらゆる動物の中で最も遅い。一歳は人間の一歳、二歳は二歳、十五、六歳でほぼ一人前になり、寿命も六、七十歳から長寿のもので百歳まで生きる。本能だけで生きるのではなく、年長者から生きるためのさまざまな知恵を学ぶために、これだけゆっくりと成長するのだろう。①

このような点からみると、鯨と象と人は確かに似ている。しかし、だれの目にも明らかなように、人と他の二種とは何かが決定的に違っている。

現代人の中で、鯨や象が自分たちに匹敵する「知性」をもった存在であると素直に信じられる人は、まずほとんどいないだろう。それは、我々が、言葉や文字を生み出し、道具や機械をつくり、交通や通信手段を進歩させ、今やこの地球の全生命の未来を左右できるほどに科学技術を進歩させたこの能力を「知性」だと思いこんでいるからだ。

これらの点からみれば、自らは何も生産せず、自然が与えてくれるものだけを食べて生き、あとは何もしないでいるようにみえる（実はそうではないのだが）鯨や象が、自分たちと対等の「知性」をもった存在とはとても思えないのは、当然のことである。

しかし、一九六〇年代に入って、さまざまな動機から、鯨や象たちと深くつきあいをするようになった人たちの中から、この「常識」に対する疑問が生まれ始めた。

鯨や象は、人の「知性」とは全く別種の「知性」をもっているのではないか、あるいは、人の「知性」は、このガイアに存在する大きな「知性」の偏った一面の現れであり、もう一方の面に鯨や象の「知性」が存在するのではないか、という疑問である。

この疑問は、最初、水族館に捕らえられたオルカ（シャチ）やイルカに芸を教えようとする調教師や医者や心理学者、その手伝いをした音楽家、鯨の脳に興味をもつ大脳生理学者たちの実体験から生まれた。

彼らが異口同音に言う言葉がある。それは、オルカやイルカは決して、ただえさを欲しいがために本能的に芸をしているのではない、ということである。

彼らは捕らわれの身となった自分の状況を、はっきり認識している、という。そして、その状況を自ら受け入れると決意した時、初めて、自分とコミュニケーションしようとしている人間、さしあたっては調教師を喜ばせるために、そしてその状況の下で自分自身も、精いっぱい生きることを楽しむために、「芸」と呼ばれることを始めるのだ。水族館でオルカが見せてくれる「芸」のほとんどは、実は人間がオルカに強制的に教えこんだものではない。オルカのほうが、人間が求めていることを正確に理解し、自分のもっている高度な能力を、か弱い人間（調教師）のレベルに合わせて制御し、調整をしながら使っているからこそ可能になる「芸」なのだ。

例えば、体長七メートルもある巨大なオルカが、狭いプールでちっぽけな人間を背ビレにつかまらせたまま猛スピードで泳ぎ、プールの端にくると、合図もないのに自ら細心の注意をはらって人間が落ちないようにスピードを落とし、そのまま人間をプールサイドに立たせてやる。また、水中から、直立姿勢の人間を自分の鼻先に立たせたまま上昇し、その人間を空中に放り出す際には、その人間が決してプールサイドのコンクリートの上に投げ出されず、再び水中の安全な場所に落下するよう、スピード・高さ・方向などを三次元レベルで調整する。こんなことがはたして、ムチと飴による人間の強制だけでできるのだろうか。ましてオルカは水中で生活しているセメートルの巨体の持ち主なのだ。

そこには、人間の強制ではなく、明らかに、オルカ自身の意志と選択がはたらいている。狭いプールに閉じこめられ、本来もっている高度な能力の何万分の一も使えない過酷な状況におかれながらも、自分が「友」として受け入れることを決意した人間を喜ばせ、そして自分自身も生きることを楽しむオルカの「心」があるからこそできることなのだ。

また、こんな話もある。

人間が彼らに何かを教えようとすると、彼らの理解能力はおどろくべきはやさだそうだけれども、同時に、彼らもまた人間に何かを教えようとする、というのだ。

フロリダの若い学者が、一頭の雌イルカに名前をつけ、それを発音させようと試みた。イルカと人間では声帯が大きく異なるので、なかなかうまくいかなかった。それでも、少しうまくいったときには、その学者は頭を上下にうんうんと振った。二人（一人と一頭か）の間ではそのしぐさが、互いに了解した、という合図だった。何度も繰り返しているうちに、学者は、そのイルカが自分の名前とは別の、イルカ語のある音節を同時に繰り返しているうちに、学者は、そのイルカが自分の名前とは別の、イルカ語のある音節を同時に繰り返し発音するのに気がついた。しかし、それが何を意味するのかはわからなかった。そしてある時、はたと気づいた。「彼女はわたしにイルカ語の名前をつけ、それをわたしに発音せよ、と言っているのではないか。」そう思った彼は、必死でその発音を試みた。

自分でも少しうまくいったかな、と思った時、なんとその雌イルカは、うんうんと頭を振り、とてもうれしそうにプールじゅうをはしゃぎまわったというのだ。②

③

象については、こんな話がある。

アフリカのケニアで、ある自然保護官が象の寿命を調べるため、自然死した象の歯を集めていた。草原で新しく見つけた歯を持ち帰り倉庫に納めておいたところ、その日から毎晩、巨大な象がやってきて、倉庫のかんぬきを開けようとする。不思議に思ったその保護官は、ある晩、かんぬきを開けたままにしておいた。すると、翌朝、数百個も集められていた歯の中から、その新しく収集した歯だけがなくなっていた。保護官がその歯を捜したところ、その歯はなんと、彼が発見したまさにその場所にもどされていたのだ。毎晩倉庫にやってきた象は、たぶんなくなった象の肉親だったのだろう。それにしてもその象は、どうやって歯が倉庫にあることを知ったのだろう。数百個もある歯の中から、どうやって肉親の歯を見分けたのだろう。そして最大のなぞは、その象が、なぜ歯を元の場所にわざわざもどしたのだろう、ということだ。

このように、鯨や象が高度な「知性」をもっていることは、たぶんまちがいない事実だ。

しかし、その「知性」は、科学技術を進歩させてきた人間の「知性」とは大きく違う物だ。人間の「知性」は、自分たちだけの安全と便利さのために自然をコントロールし、意のままに支配しようとする、いわば「攻撃的な知性」だ。この「攻撃的な知性」をあまりにも進歩させてきた結果として、人間は環境破壊を起こし、地球全体の生命を危機に陥れている。これに対して、鯨や象のもつ「知性」は、いわば「受容的な知性」とでも呼べるものだ。彼らは、自然をコントロールしようなどとはいっさい思わず、そのかわり、この自然のもつ無限に多様で複雑な営みを、できるだけ繊細に理解し、それに適応して生きるために、その高度な「知性」を使っている。

だからこそ彼らは、我々人類よりはるか以前から、あの大きな体でこの地球に生きながらえてきたのだ。同じ地球に生まれながら、片面だけの「知性」を異常に進歩させてしまった我々人類は、今、もう一方の「知性」の持ち主である鯨や象たちからさまざまなことを学ぶことによって、真の意味の「ガイアの知性」に進化する必要がある、とわたしは思っている。

組　番　名前（　　）

No1

①例えば象の一生はつぎのように分けられる。まだ牙のはえない三歳までが赤んぼう時代。牙がはえてくる三歳から十歳までが依存時代。高さが二五メートルぐらいの大きさになる十歳から十八歳までは若者時代。赤んぼうをうむようになる二十歳くらいからは大人。そして、五十歳をすぎると年寄り時代である

②次はクジラの例である。クジラが鳴く事が知られるようになってクジラが発する音が優れた働きをする事が明らかになった。

クジラは高い音から低い音まで十さまざまな音を出すことができる。しかも非常に短い音と、長く続く音を目的別に使いわけているのである。短い方の音は、周りの様子を知るための音である。クジラの聴覚は大変発達している。自分達の発した短い音が周りの物にあたり、はね返ってくるだけでそのものがどれくらいの大きさなのか、何でできているのかさらに自分達のえさとなる魚達がどの方向へどれくらいの大きさなのか、何でできているのか、また、止まっているのか動いているのかさえも分かってしまう。

もう一つの低い連続した音は主として仲間どうしのコミュニケーションに使われる。これがおもしろいことに同クジラでも群によって使われる音は違うことがある。それぞれの群れはその群れにしか通じない方法で情報を伝えあっているのかもしれない。すなわちクジラ達は自分達が暮らす環境の中で一番適した手段を活用し、生活しているのである。

③日没後、あたりがうす暗くなって来たリアボ国立自然公園を車で走っているときの事である。移動している象の群れがブッシュの向こうに見えた。急いで車を近づけてみようとした時、象の群れは群れのみんなが顔を外に向けて、円陣をつくったのだ。みんなは鼻を大きくひろげている。なかには鼻を高くあげて、こちら向けている象もいる。

この時、円陣の中に赤んぼうがいるのに気が付いた。象の群れは円陣の中に赤んぼうをかくして警戒をしていたのだった

組　番　名前（　　）

No2

実践例　　選択国語

①. **題　　材**　「伝統芸能探究」

②. **題材について**

世界がどんどん狭くなり、社会の国際化に対応する必要性が高まってきている。本校でも複数のＡＬＴによる英会話の授業も行われ、昨年度よりは複数の教科による国際理解につながる授業ももたれている。生徒の他国への親近感も１０年前に比べれば飛躍的に増しており、他国の方に対する抵抗感も校内ではほとんど感じられない。しかし自らが居住している日本の、地元和歌山の、文化を他国の方に紹介できるかという点になると、紹介はおろかまったく知らないということも少なくないのが現状である。

実際に和歌山県御坊市にある道成寺に伝わる「安珍、清姫」の話を知っているかを尋ねたところ、三年生１５９名では、話を完全に知っていると答えたものはおらず、合唱団に入っている生徒２名が歌を知っていると答え、「安珍、清姫」ということばを聞いたことがあると答えた生徒が二割ほどであった。二年生で選択「伝統芸能探究」の授業を受けている生徒にも同じ質問をしたところ、歌を知っていると答えた生徒が２名、あとの生徒は知らないとのことであった。以前なら誰もが知っているようなお話を異国の物語のように感じているのかもしれない。

国際化が進み、他国の方に接する機会が増え、一人ひとりが日本の顔とならなければならない時代が来つつある現在、地元のお話さえ知らない生徒に、まずは日本の伝統芸能に接する機会をできるだけ多く持ちたいと考えた。次にそこから得たものを他者に伝えようとするということを目標とした。

授業をするにあたって、本校総論「学びを拓く三つの視点」および今年度の国語科総論に沿って、次の力をつけることを念頭に置いて計画を立てた。

① 主体的に問題を解決する力

国語科総論にしたがって、「何を」＝書く内容、「どう」＝書く技能、「なぜ」＝相手意識、と考える。今回、書く内容については狂言・歌舞伎・能楽・文楽より選択して紹介するチラシを作らせることとした。書く技能については、歌舞伎のチラシなどの提示によって目を引く形を考えるとともに専門用語などを中学生にもわかる表現にすることをねらいとした。相手については、伝統芸能にまったく知識のない中学生を意識させた。

② 自己を表現しコミュニケーションする力

授業で知り得た知識と自ら収集した情報をもとに伝統芸能の紹介チラシを作り掲示することをコミュニケーションと位置づけたい。

③ 学びを振り返る自己評価の力

「効力感」を持たせるために、はじめの授業とチラシを作る前時にチラシが作れそうかどうかを問うこととした。チラシ作成後にも自己評価をすることにより７時間前までは何も知らなかった自分自身の成長を実感させたいと考える。

③. **学習目標**（評価規準の設定　基礎・基本）

基礎･基本	学習の目標	・伝統芸能の形式、決まりごとを知り、作品にふれる。 ・収集した情報を編集し、他の生徒に伝える。
関心・意欲・態度	・伝統芸能に関心を持つ。 ・伝統芸能に親しむ。	
書　く	・作品、資料から情報を収集し、紹介チラシが書ける。	
読　む	・伝統芸能の基本的な形式や歴史を知る。 ・必要な情報を集め、紹介チラシの表現に役立てることができる。	
言語知識・理解・技能	・古語で話される台詞を聞きながら作品の内容を把握する。 ・伝統芸能の知識のない中学生にもわかる表現を工夫して書くことができる。	

④. **学習計画**（単元構成表）

学習過程	学習の中心	基礎･基本を定着させるための視点	「学びの拓き」に関わる力※	観点
学習の概要を知る。 （1時間）	・学習の概要・目標を知る。 ・学習の見通しを立てる。	・映像を見ることによって、伝統芸能への関心を高める。 ・これからの学習に対する現時点での見通しをプリントに記入させる。	・進んで知ろうとする態度（問題）	関心意欲態度
狂言の歴史、形式、決まりごとを知る。 （1時間）	・資料で狂言の歴史を知る。 ・狂言の現在の公演の状況を知る。 ・映像で狂言に親しむ。 ・評価カード（毎時間用）を使い、鑑賞した狂言の内容を確認し、感想を書く。	・映像に字幕をつけることにより、古語への抵抗を弱める。 ・評価カードで内容を確認させる。	・進んで知ろうとする態度（問題） ・内容を理解する力。（問題）	関心意欲態度 知識理解
文楽の歴史、形式、決まりごとを知る。 （1時間）	・資料で文楽の歴史を知る。 ・文楽の現在の公演の状況を知る。 ・映像で人形劇に親しむ。 ・評価カード（毎時間用）を使い、鑑賞した人形劇の内容を確認し、感想を書く。	・現代の人形劇で雰囲気をつかませる。 ・評価カードで内容を確認させる。	・進んで知ろうとする態度（問題） ・内容を理解する力。（問題）	関心意欲態度 知識理解
能楽の歴史、形式、決まりごとを知る。 （1時間）	・資料で能楽の歴史を知る。 ・能楽の現在の公演の状況を知る。 ・映像で能楽に親しむ。 ・評価カード（毎時間用）を使い、鑑賞した能楽の内容を確認し、感想を書く。	・映像に字幕をつけることにより、古語への抵抗を弱める。 ・歌舞伎の「娘道成寺」と見比べることにより、歌舞伎と能楽の違いを確認させる。 ・評価カードで内容を確認させる。	・進んで知ろうとする態度（問題） ・内容を理解する力。（問題）	関心意欲態度 知識理解
歌舞伎の歴史、形式、決まりごとを知る。 （1時間）	・資料で歌舞伎の歴史を知る。 ・歌舞伎の現在の公演の状況を知る。 ・映像で歌舞伎に親しむ。 ・評価カード（毎時間用）を使い、鑑賞した歌舞伎の内容を確認し、感想を書く。	・映像に字幕をつけることにより、古語への抵抗を弱める。・評価カードで内容を確認させる。	・進んで知ろうとする態度（問題） ・内容を理解する力。（問題）	関心意欲態度 知識理解
伝統芸能紹介チラシを作成する。 （2時間）	・狂言・歌舞伎・能楽・文楽からいずれか一つを選択し、紹介チラシを作る。	・歌舞伎のチラシを参考にさせる。 ・相手意識を持たせる。 ・自分の紹介したい内容が表現できたか、自己評価する。	・目的や必要に応じて、資料を探す力。（問題） ・収集した情報を効果的に活用する力。（問題） ・的確に書き表す力。（問題）	思考判断 思考判断 技能表現

⑤. **本時の目標**

・見やすいレイアウトを考える。

・中学生にもわかる表現にする。

⑥. **本時の展開**

学 習 活 動	教 師 の 支 援	備 考
1．本時の目標を知る。	・前時までの学習を振り返り、本時の目標を明確にさせる。	前時提出の評価カード(毎時間用)返却
2．狂言・歌舞伎・能楽・文楽の資料を読み、いずれか一つを選択し、紹介チラシを作る。	・歌舞伎のチラシなどを参考に、レイアウトを考えさせる。 ・文言についても資料そのままにせず、中学生にもわかる表現とするよう指示する。	資料 机間巡視(個別指導)
3．本時の活動を自己評価する。	・評価カードで本時の活動を振り返らせる。	評価カード

⑦. **結果と考察**

はじめの授業で、授業の概要を知らせ見通しを尋ねたところ、「できそうだ。」と答えた生徒が１名、他の生徒は「難しそう。」「う～ん、できるかな？」と否定的な答えだった。題材についてでも述べたように地元の話でさえ聞いたことがない生徒たちである。まず狂言の「茸」を見せたが、言葉が古語であること、生徒の日常とはあまりにもテンポが違うことなどにとまどった様子であった。そこで以後は言葉への抵抗感を除くため字幕をつけた。また、演目も親しみやすいと思われるものを選ぶようにした。狂言では「萩大名」を、能楽では鐘入りという見せ場のある「道成寺」を、歌舞伎では十八番といわれる「勧進帳」で大向こうから声のかかる様子や弁慶の六方を踏む引っ込みを、そして野田版「研辰の討たれ」で現代のダンスのようなシーンやだんまりのおもしろさを見せながら、歴史や決まりごとを学習した。全体としては「字幕がないと何をしゃべっているのかわからない。」「動きや言葉がゆっくりで眠くなった。」という感想があった。しかしまた次のような感想もあった。

狂言については、

・今の喜劇を見ているようで、おもしろかった。テンポは遅いけど、あの間がおもしろい。

・あの動きをするのは体をすごく鍛えているのだろうな。

・思っていたよりおもしろかった。

人形劇については、

・表情がそんなにないはずなのに、気持ちはわかった。

・いつのまにか人形だということを意識しなくなった。

能楽については、

・迫力があった。

・歌舞伎の「娘道成寺」とずいぶん違うので驚いた。

歌舞伎については、

・「娘道成寺」の清姫が男の人なんて信じられない。

・早替わりがすごかった。はじめは衣装が重いだろうな。

と坂東玉三郎の美しさに驚いたり、早替わりに目を丸くする生徒が多かった。

・「勧進帳」はよくわからなかったけれど、「研辰の討たれ」は吉本新喜劇を見ているようで声を出して笑ってしまった。客席も笑っていて驚いた。

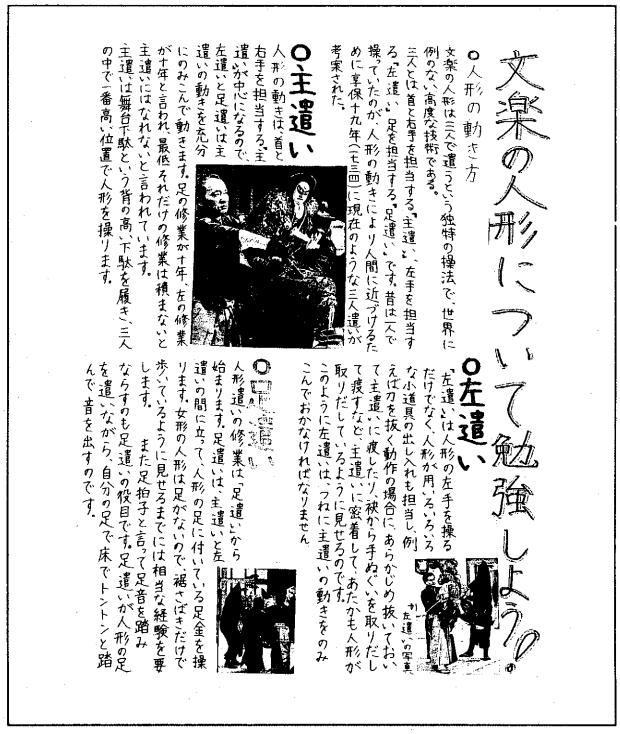
と伝統芸能というものは、しかめっ面をして終始無言で見ていなければならぬものと思っている生徒　がいることをうかがわせた。

５０分という時間の制約の中で歌舞伎は全編見ることができないため、特色のある部分、親しみやすい部分と切り取って見せたのだが、そのため「勧進帳」はわかりにくくなったようだ。

第五時を終わった時点で今後テレビなどの放映があれば見てみようと思うという感想が複数あったことをうれしく思った。伝統芸能の一通りの学習を終えたところでチラシ作成の見通しを尋ねたところ全員が「大丈夫。」あるいは「できそう。」という答えであった。「効力感」を持たせたいというねらいは一応達成できた

のではないかと思われる。ただハードルをあまり高くしていないという反省もある。チラシ作成に取りかかった時点で何を選択するか迷っている生徒はいなかった。しかし授業の終わりではもっと時間がほしかったという声も聞かれた。作品作成の具体的見通しを立てさせるという点で指導不足であった。作品は根上がり祭り（本校の文化祭）で掲示し、全校生徒の目に触れるようにした。

振り返って七時間という時間で歌舞伎・能楽・狂言・文楽の伝統芸能を取り入れたのは欲張りすぎであった。先日狂言の公演を鑑賞しにいったとき隣に座った芸能についてのレポートを書かねばならないらしい女子大生の「わたし、歌舞伎と狂言の違いが今一つわからないのよね。」という言葉が思い出される。このような短時間につめこむことは歌舞伎と狂言の区別のつかない生徒を作る危険をはらんでいる。一つに絞ってじっくり鑑賞できるような形を考えていけば、これらの芸能のすばらしさや深さに迫ることができただろうと思われる。また作品の掲示はしたが、作品への反応を聞く手だてをとらなかったことが反省される。



選択「伝統芸能探究」

鑑賞ノート

（　　）組　氏名（　　）

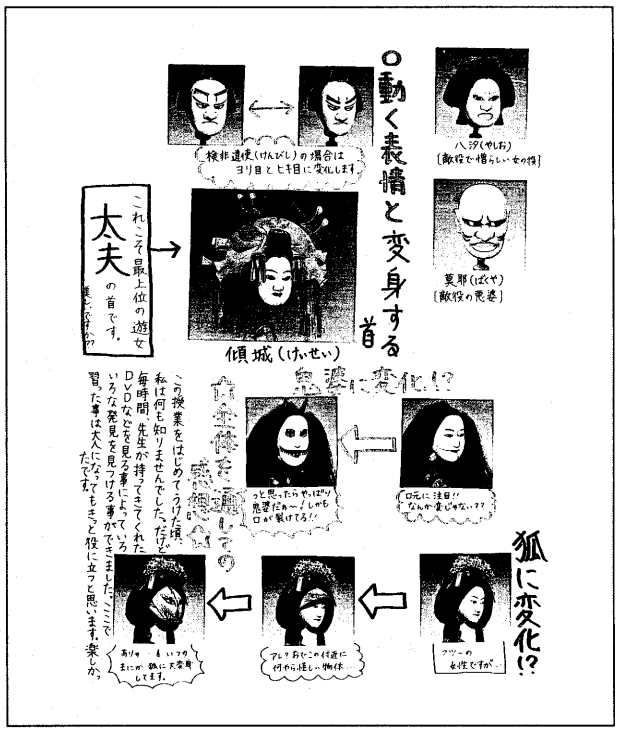
鑑賞したのは（　　）、

題名は（　　）

あらすじ

大名もの。土地訴訟で長らく在京していた大名（中世の豪族）が、めでたく本領を安堵され、余分の領地まで賜ってまもなく帰国という日に、家来の太郎冠者を伴ない、清水坂の茶屋に萩の花を見物に出かける。

感想



成果と課題

本年次を振り返って、「学びを拓く３つの視点」に沿って成果と課題をまとめる。

①主体的に問題を解決する力

国語科では「主体的に」を「強い課題意識を持って」ととらえ、何を・どう・なぜ表現伝達するかという観点で学習過程を明確化することを試みた。

実践例にも示したように、表現のための材料（＝何を）を確保すること、表現の技能・レトリック（＝どう）を学ぶことは、主体的な表現学習には極めて有効であると言える。例えば実践例１で、俳句の読み取りによって表現のための材料が確保されたり、鑑賞文の書き方というレトリックが理解されれば、意欲（効力感）も高まり、到達度の高い作文が期待できるということに表れている。また、実践例３のように具体的な発表場面が設定されると相手意識（＝なぜ）が明確になり、ここでも主体的な学習は有効に進められていく。

今後の課題としては、「相手意識」に焦点化した伝達意欲が、実践によっては明確化するのが困難であると感じられることである。これにはもう一つ、評価（成績・通知票）というヒドゥン・カリキュラムも大きく影響することがある。特に学年の進行に従って見え隠れするこのヒドゥン・カリキュラムを、生徒の意識から払拭するのはかなり難しいと感じた次第である。

②自己を表現しコミュニケーションする力

国語科においては、コミュニケーション力が学習の手段ではなく、学びの目的そのものである。本年度も「話す・聞く」だけでなく「読む」「書く」学習においても双方向の伝え合う場面を設定し、より多くの経験をさせることで取り組みを充実させてきた。コミュニケーションと言えば「話す・聞く」がまず想起されるが、子どもの生活の現状（チャット、ブログ、掲示板等）を見るにつけ、返って「読む」「書く」におけるコミュニケーションを注目する必要があると感じるのである。そうした意味でも、本年次の実践例がすべて「書く」ことを中心に単元化されているのは重要であろう。年間カリキュラムを通してコミュニケーション力を鍛えていくのが大事である。

③学びを振り返る自己評価の力

「肯定的な自己評価」を目標に、評価場面をさまざま設定してきた。とりわけ本年次は「効力感」をキーワードとして、一つの課題に取り組む直前により高い自己評価ができるような実践をしてきた。この点については、実践例１および２に表れた通り一応の成果を得られたと考えている。ただ同時に、実践例２「質の高い達成感」、同３「ハードルを高く」という文言に表れたように、効力感と成就感・達成感とのズレや自己評価の質の問題が今後の大きな課題として浮かび上がってきている。自己モニタリングを助け、自尊感情につながる自己評価を、さらに研究していく必要を痛感している。